

# Gregor Benton Mountain Fires

—The Red Army's Three-Year War in South China, 1934-1938

Berkeley and Los Angeles, California, University of California Press 1992, xxix + 639pp.

## 三好 章

第二次世界大戦の重要な一部であった日中戦争が終結してから、半世紀あまりがたった。日本で「戦後五十年」がさまざまな形で記念あるいは祈念されたように、侵略戦争に抵抗した中国でも、一九四五年を節目の年として「戦勝五十年」を記念する行事が各地で開かれ、国際シンポジウムを含む学会も、八月から九月にかけていくつも開催された。『抗日戦争史研究』（北京、近代史研究雑誌社）一九九三年第四期には、「戦勝五十年」を記念する国際シンポジウムや展覧会、記念碑の除幕式などが、この時期に十七も開かれたことが、かなりのページを割いて紹介されている（同誌一四三～二一八ページ）。同誌にはまた、「天磁杯抗日戦争勝利五十周年知識競賽」という抗日戦争を題材としたクイズが、『人民日報』理論部・『抗日戦争史研究』編輯部・天磁公司の共催で五月から始められ、七月末日消印有効で締め切ったところ、黒龍江から海南島まで、小学二、三年生から退役した解放軍兵士など八十歳を優に越える人々から、合計三万通以上の応募が

あったという（同誌二一九～二二五ページ）。問題は全部で四十問、一九三一年の「満州事変」から戦後の東京裁判まで、十五年戦争の時間の枠で出題されていた。クイズという形式に抵抗を感じる向きがあるかもしれないが、五十年前に「終わった」日中戦争の記憶が、世代を越えて受け継がれているのである。しきりに言われていることではあるが、やはり侵略を受けた地域において、その記憶は生々しく残るのが当然であり、その意味もまた侵略した側とは異なっていて当然であろう。

そうした日中戦争、中国側から言えば抗日戦争での抵抗主体の動きについて、これまで多く語られ、かつ研究されてきたのは、主として中国共産党の影響下にあった軍隊、とりわけ華北の「敵後方」で活動した八路军であった。毛沢東にスポットをあてたエドガー・スノーの『中国の赤い星』のみならず、同様に朱徳の経歴を中国近代史の上に重ねたスmedレーの『偉大なる道』など、いくつもの感動的なルポルタージュも八路军に関する

ものが多かった。また、『中国の赤い星』でかなりの紙幅を割いて叙述された長征の有様も、歴史資料としての有効性は現在では重んずる者も少ないが、ともかく来るべき八路军と毛沢東の活躍を準備した雄伏の時期として、胸を打つものであった。もつとも、現在これを読み直すと、全体に「革命の聖地延安」へ向けての予定調和となっていることに否応なく気づかされ、これもまた一つの政治文書としての役割をしばらくの間担っていたことは否定し得まい。

いっぽうで、長征に加わらず、南方に残った人々が中心となった新四軍については、本書で Benton 氏もしきりに述べておられるが、特に一九六〇年代から一九七〇年代にかけては言及されることもなく、八路军に比べるとさほど知られずに来た。一九九〇年代に入って、国民党を中心とする「正面戦場」への関心が、最近の台湾との関係もあつて高まっているのに対し（陳崇鈺ら「李宗仁の抗戦思想と台児荘の大勝」、『中国研究月報』一九九六年二月号など）、華中の抗日勢力

であつた新四軍への関心はまださほど高いとは言えない。さきにあげたクイズの問題も、八路军に関するものが六題であるのに対し、新四軍に関しては独立した問題は皖南事変に関するもの一問のみ、八路军と抱き合わせて出題されたものが紅軍からの改編と、抗戦での戦果に関するものと合わせて二問しかなかった。

文化大革命期に打倒された劉少奇が南方局で新四軍の活動に深く関わり、皖南事変で戦死する新四軍軍長の項英が毛沢東のライヴァルでもあつたことなどから、一九六〇年代初頭までは『星火燎原』全十巻（北京、戦士出版社、毛沢東没後の一九七七―八二年に重版）など、まとまった革命史の回憶が企画されたことがあつても、一九六〇年代後半以降、特に文化大革命開始後は、新四軍に対する関心は中国では表立っては高まることはなかった。Benton 氏が本書を著わそうとした主要な動機も、ここにある。

紅軍主力が長征に出発した一九三四年終盤から、盧溝橋事件後の一九三七年後

半にいたる間、中華ソヴィエト共和国があつた地域に残った人々は、サヴァイヴアルの苦闘の歴史を繰り返した。これが南方三年遊撃戦争である。本書は、この南方三年遊撃戦争に関するおそらく最初の全面的な紹介と研究であり、かれら長征に参加しなかった残留部隊が重要な役割を果たすことになる、抗日戦争期の新四軍への改編までを視野におさめたものである。

本書は、こうした南方三年遊撃戦争の全体像を膨大な分量の回憶録を基礎史料に、ディテイルにこだわりの描き、語ることに主眼を置き、その分量も長大である。従つて、本稿では各地域ごとの叙述の検討はなるべく避け、Benton 氏のパースペクティヴと分析の方法論、回憶録を歴史資料として用いる時の問題、などに焦点をあてて論じてみたい。

本書の著者 Gregor Benton 氏は現在イギリスのリーズ大学東アジア学部に上級講師。一九八四年と一九九一年、天津南開大学で開催された「中国抗日根拠地史国

# Contents

The Soviet Falls, the Three-Year War Begins  
 Gannan (贛南): Seeds of Fire  
 Ganyue (贛粵): Heroes in Defeat  
 Minxi'nan (閩西南): Mountain Marxist  
 Minzhewan'gan (閩浙皖贛) (1)  
 Zhe'nan (浙南): Walking on Two Legs  
 Minbei (閩北): The Party and the Dao  
 Mindong (閩東): The Wily Hare  
 Wanzhegan (皖浙贛): Gathering the Fragments  
 Minzhewan'gan (閩浙皖贛) (2)  
 Eyuwan (鄂豫皖): The One-Armed General  
 Xiang'egan (湘鄂贛): Preserving to the End  
 Xianggan (湘贛): The Peasant Patriarch  
 Xiangnan (湘南)  
 Min'gan (閩贛)  
 Annanyongde (安南永徳)  
 Hailufeng (海陸豊)  
 Wanxibei (皖西北)  
 Qiongya (瓊崖)

## The Three-Year War Ends, Guerrillas Unite The Three-Year War in Historical Perspective

この他に、Appendixとして"Leaders of Reguards and of the Three-Year war"地図十一葉、および、英語圏の研究書としてはスタンダードであるが、詳細な注釈と参考文献とが付さ

際学術討論会」には何れも参加し、論文を提出している(南開大学歴史系編『中国抗日根拠地史国際学術討論会論文集』北京、檔案出版社、一九八六年、南開大学歴史系中国近现代史教研室『中外学者論抗日根拠地——南開大学第二届中国抗日根拠地史国際学術討論会論文集』北京、檔案出版社、一九九三年)。また、『The Journal of Asian Studies』一九八六年八月号には『The South Anhui Incident』を発表している。本書のもととなった未公

刊のPh. D. 論文『The Origins and Early Growth of the New Fourth Army, 1934-1941』を一九七九年に著わしている。本書の構成を目次に従って示すと、左記の通り。なお、括弧内の漢字は評者が補ったもので、蛇足ながら贛は江西省、粵は広東省、閩は福建省、浙は浙江省、皖は安徽省、鄂は湖北省、豫は河南省、湘は湖南省のそれぞれ略称。また、安南永徳は福建省の安西県・南岸県・永春県・徳化県の各県にまたがる地域、澎湃

れている。

目次を見ればあきらかであるが、Benton氏は、本書の中で南方三年遊撃戦争時期の華中・華南の根拠地・遊撃区を十八の地域に分け、それぞれについて検討している。しかしながら、鄧子恢・譚震林らが活動した閩西南地域が七十ページ以上、項英・陳毅が活動した贛粵地域が四十ページ、溥秋涛・譚余保らが活動した湘贛地域が三十ページほども費やしているのに対し、史料状況の相違から、海陸豊・皖西北・瓊崖の各地域はそれぞれ一ページにも満たない。史料状況の差は、当時の各地域の状況を反映しているが、また成立後の人民共和国において中央政府の要職に就いた者が多かったか否かにもかわっている。一次史料は残せなくとも、回憶録は後から書けるのであるから。この時期のこの問題に限らず、中国共産党に関する歴史を扱おうとすると避けて通れぬ問題であり、史料に裏付けられた事実を語る歴史としては、叙述しうるか否かの分岐点でもある。

Benton氏は、南方三年遊撃戦争が「中

国革命の背後の深淵」にあり、「一九八〇年代まで、革命の主流のほんの簡略な脚注」の役割しか与えられなかった理由として、以下の二つをあげている（本書p.xv）。第一に南方三年遊撃戦争には毛沢東の出番がないこと、第二に南方三年遊撃戦争自体が中華ソヴィエト共和国の崩壊という深刻な革命戦略の失敗から始まったことである。それは、長征が結果的に毛沢東の指導権を確立し、毛沢東と中国共産党中央の所在地として「革命の聖地延安」を現出させ、華北では日本軍と傀儡軍以外を敵にしたことがほとんどなかった八路军を生み出しこと、好対照であろう。残留した紅軍に由来する新四軍は、その形成過程からして八路军以上に国民党との交渉に左右されたのである。実態としても、軍勢力が整うのは一九三八年に入ってからである（拙稿「新四軍の成立過程について」『季刊中国研究』第一号、一九八八年、中国研究所参照）。さらに、新四軍は一九四一年初めの皖南事変で壊滅的な打撃を受けるが、その前後から国民党との摩擦の焦点

であり、日本軍以上に国民党軍とも戦わねばならなかったのである。

それでは、Benton氏は「中国革命の背後の深淵」の中から南方三年遊撃戦争の事実を呼び出すことで何を示そうとしたのだろうか。それは何よりも、新四軍形成の歴史を確定することである。その際、南方三年遊撃戦争がいずれの地域にあつてもきわめて陽の当たらない主要な（“right and leading”）指導者によつて担われたことがないこと、後に国家レヴェルでの指導者となつた者が極く少数であること、しかし政治局の文獻よりも南方三年遊撃戦争の実態に迫ることが中国共産主義運動の長所と短所の原因を明確にし得ること、さらに南方三年遊撃戦争が中国革命の全過程においても、他に匹敵するものがない人間の忍耐の叙事詩（*epic of human perseverance*）であること、などをあげている（本書p.xii）。

中国革命のモデルがどれか一つに絞られるものか否かはともかく、これまで華北の陝甘寧辺区や晉察冀辺区にモデルを求

めることが多かった状態からの脱却が早急に迫られているのが、一九八〇年代以降の研究の現状であろう。そして、それを補強するためにも政治局の公式文獻だけではなく、ファイルド・ワークにできるだけ近いものを利用することが求められている。これを可能にするもののひとつは、現在のところ回憶録であろう。

Benton氏がこの研究を始めた当初、「情報」の主要な来源は、文革前に出版されたいくつかの断片的な回憶録であつた（同前）のであるが、それは台湾での史料収集と、なによりも鄧小平の「改革開放」政策によつて、急速に改善されたのである。Benton氏は「改革開放」期になつて漸く中国大陸を旅行する機会を得、南方三年遊撃戦争の舞台となつた華中・華南の各省を目の当たりにし、そこに参加した老戦士たちへのインタビューを行っている（本書p.xix）。

回憶録を中心的史料として用いることから窺われるが、Benton氏が一貫して持っているものは人間そのもののへの関心であり、その性向は文学的でさえある。

南方三年遊撃戦争を人間の忍耐の叙事詩と表現することや、時折見せるシェークスピアとその研究の引用（本書p. xxi など）などが、本書を従来の社会科学としての歴史学とは一味違ったものにしていく。また、本書には Benton 氏の翻訳による陳毅の詩が収められ（本書 pp. 116-123）、これも彼の文学への傾倒を示している。これらは、ディテールから全体を見ようとする姿勢とともに、Benton 氏が意図したかどうかは不明であるが、かなりの部分、社会史の方法論に接近しているともいえよう。こうしたパースペクティブと方法論とでこの時期の中国を見ようとするのは、まだ勇気のあることかもしれないが、新しい近代中国像を獲得するには有用なやり方であろう。

回憶録という歴史資料について、Benton 氏はそれは「過去への扉」であるが、「倉庫ではなく、選別器」でもあるとし、ひとつの回憶録に全面的に依拠するのははなく、いくつかの回憶録や、他のジャンルの史料との突き合わせの必要を説き、精緻かつ厳格な資料操作を必要とするとする（本書 p. xxix）。もちろん、なるべく初出に近いもの、一次史料に近いものに接近しなくてはなるまい。当たり前の話であるが、これはテキストクリティクの基本であり、妥当なものであるとともに、最も難しい作業であろう。また、現代中国という政治過剰の世界での回憶録ということで、その特徴として「敗者は盗人（the loser is a thief）」とされる傾向がある（本書 p. x）という。「勝てば官軍」である。「敗者」には台湾へ行った国民政府ばかりか、共産党内部の界限のない内部抗争での敗者も含まれるのであり、それゆえここにおける回憶録は政治文書である（本書 p. x）。政治過剰を結果的に社会に要求してきたマルクスレーニン主義に加え、伝統中国の政治文化が倫理道德と密接に結び付いていたことは、郷紳の権威の来源の一つに儒教を身につけた人格者とのイマージュがあることから明白であろう。また、超歴史的な言い方をすれば、勝者が自らの勝利をいつそう際立たせるため、敗者を

必要以上に貶めることは、しばしば見られることである。加えて、中国では次の王朝が前代の王朝の「正史」を編纂して、その正統性を中華世界に示してきた伝統がある。諸橋轍次氏の『大漢和辞典』（東京、大修館書店）には、「歴史」の説明として、「歴」はこよみ、「史」は人君の言行を筆記する官であり、「説文解字」からの引用として「史、記事者也、従又持中、中、正也」とあり、「周礼」からは「史官主書」が引用されている。これらは「正史」の説明であり、それに対して「野史」も存在するが、それを参照する際は、「正史」との引き合わせなしには行えなかったのである。そうすると、回憶録はさしずめ「実録」の素材とも言えるべきものである。やがて正式な伝としてまとめられるのを期待するのである。たとえば一九九六年現在、五十五巻を数える『中共党史人物伝』（北京、人民出版社）がその一例である。張国燾の『我的回憶』全三巻（香港、明報月刊社、一九七一一一九七四年）や龔楚の『我和紅軍』（香港、南方出版社、一九五四年）

のような、中国共産党から離脱した人々の手になる回憶は、現在の中国共産党から見れば当然「野史」である。本人の意志に沿って書かれたかどうかもふくめ、回憶録が政治性を強くおびた文書であることは当然である。Benton氏も充分に理解しておられるが、どの時点であるにせよ回憶者が政權に近ければ近いほど、その程度もまた高くなるのである。それゆえ、Benton氏は一層厳しいテキストクリティクを自らに課するのである。しかし、それが可能となったのはやはり上述のように一九七八年以降、とりわけ一九八〇年代に入って「改革開放」が本格化してからであった。文革期には「天体観測のようであった」(本書p.xxii)中国近現代史研究が、現在では歴史資料の現物に当たれるようになり、情報提供者とも直に会えるようになったのである(本書p.xxiii)。これは、まさにそのとおりであり、一九七〇年代に研究に足を踏み入れた評者も同感である。当時、中国大陆の大学に留学するなど、特別な関係でなければ不可能であり、よしんば留学

できたとしても、当時のような史料状況では十分な研究は保障され得なかった。現在でも、未だ十分に研究機関や史料が公開されているとは言い難いが、それでも各地の檔案館や図書館がかなり自由に使えるようになり、状況はかなり改善されつつある。こういった点も、回憶録を歴史資料としてクリティクの組上に載せうるようにした条件である。

なおBenton氏は、西洋では回憶録が個人的な企て、あるいは個人の領域に含まれるが、中国では、血縁・宗族・学校・地域などの集団が個人よりも価値あるものと見なされるため、当然出来上がる回憶録にも質的な差異が認められるとする(本書p.xx)。西洋の個人主義、中国の集団主義といった、意外と平板な二元論的中国理解のようにも思える。現代の中国が伝統中国から多くの要素を受け継ぎ、あるいはそれに囚われていることもまた事実ではあるが、伝統中国社会への理解を若干短絡的に現代中国にあてはめているようである。両者の連続性と非連

続性についての関係への考察がやや甘いように考えられる。ア・プリオリに類型的な把握をすることですまされるものなのだろうか。両者の掛け橋は何か、中華人民共和国特有の社会構成である「単位」と、前近代中国社会との関連はどうかなど、一朝一夕には結論に達すべくもないが、少くともそれらを視野に収めた研究姿勢が、我々にとっても望まれよう。

さて、本書の「ソヴィエト区の崩壊、三年戦争の開始」では、五回にわたる蒋介石による包囲攻撃で崩壊するソヴィエト区の姿が描かれる。111)でもBenton氏は、長征に加わらなかった人々の一九三四年終盤の自己犠牲と一九三七年末の奇跡的な新四軍としての復活を、忘却の中から救い出すことが本書の目的であると、くり返し述べる(本書p.1)。ソヴィエト区崩壊の原因については、度重なる食糧徴収、連続した紅軍拡大運動による人員の徴発のため、ソヴィエト区を防衛しようにも中国共産党はもはや信頼を

失い、物資と人員との来源が枯渇したためであり、財政の破綻も引起こしていたことをあげる（本書 pp. 109-111）。一九三四年十月末には、江西省を中心とした「中央ソヴィエト区では十代から五十代の健康な体の一人の男子を見つけることも難しかった。農民たちは、徴兵逃れに山へ逃げ込んだし、殺されたり後遺症が残るほど自傷する者もいた」（本書 pp. 111）という。そうして、中華ソヴィエト共和国は崩壊に向かい長征が始まるのであるが、南方三年遊撃戦争に関する最大の問題である残留者の選抜は、どのようになされたのか。これについては、管見の限りいまだに明白な文献史料の裏付けはないようである。Benton 氏は「長征——語らざる真実」（岡本隆三訳、東京、時事通信社、一九八八年、原書 一九八五年）で Salisbury 氏の言う毛沢東との関係の近さや党派的な扱いを否定する（本書 pp. 20-23）。陳毅のような毛沢東の支持者も残っているからである。もっとも、陳毅はソヴィエト区崩壊直前の戦場で重傷を負い、動きようがなかったの

である。もちろん、長征出発時の毛沢東はまだ党の実権を完全に掌握していたとは言えず、この点からも長征組と残留組とを毛沢東との関係で仕分しようとするのは無理であろう。結局、残留組をいくつかのカテゴリーに分けると、項英のような経験豊かな者、あるいは梁柏台のような党中央の支持者、さらには陳毅のような負傷者、瞿秋白のような病床に افتた者、また彼らの妻たちがいた。そして、最も多かったのはもともとソヴィエト区生え抜きの者たち（Native to the Soviet Areas）であり、それに加えて、中央ソヴィエト区での「肅清の犠牲者」の收容所が瑞金の周辺にいくつもあり、彼らは長征部隊の規律を強化し、残留部隊の背信を防止するため、残されたのだという（本書 pp. 23-25）。しかも、長征開始後も、項英・陳毅・譚震林らによつて「肅清」は続けられたという（同前）。従来、長征の足手まといとなりかねない病弱な者を主に残し、その警護の役に項英や陳毅がついた、と理解されてきた。その一方でソヴィエト区生え抜きの者た

ちの存在については、さほど注意が払われることがなかった。Salisbury 氏も同様である。しかし、三年間にわたる遊撃生活を耐えぬくにはその土地の状況に通曉していなければならず、これを保障するのは、ソヴィエト区生え抜きの者たち以外には考えられまい。また、残留組のなかに「肅清」された者たちを見いだした功績は大きい。ソヴィエト革命期から抗日戦争期にかけての中国共産党内部の「肅清」については、福本勝清氏による「中国革命への挽歌」（垂紀書房、一九九二年）・『中国革命外伝』（蒼蒼社、一九九四年）という「肅清」問題にかかわる中国共産党の内部構造と、「肅清」の当事者たちのマンタリテとに踏み込んだ先鋭な研究がある。Benton 氏はいくつかの地域に関しては「肅清」について言及している（本書 pp. 24-25, 233-240, 313-314, 506-507 など）ものの、本書の主要な目的が「肅清」問題ではないため、そこまで踏み込まなかった。もっとも、「AB団」のような、現在では事実無根であることが明白になった「肅清」の口

実については、Benton氏も「極左」の表れとして言及しており（本書 pp. 339-340 など）、この時期の「肅清」問題に無関心であるわけではない。この問題は、レーニン主義党組織理論固有のものというより、秘密結社型革命組織一般に見られるものであり、言い古された表現かもしれないがドストイェフスキーの深淵をのぞきこむ必要がある。その上、歴史の文脈からこの時期の特性を中国社会の特殊性の上に、描き出さねばなるまい。

本書の大部分を占める南方三年遊撃戦争が展開された地域そのものに関する叙述では、軍隊の地方化＝遊撃隊化を進めることが生き残りの鍵であったこと（本書 p. 77, pp. 89-90, 479-481 など）、「肅清」をふくむ階級闘争論へのこだわりを捨てた閩西南・鄂豫皖などは一定の勢力維持が可能であったこと（本書 p. 466）をあげる。後に一九三九年、独立的傾向が問題となって肅清された新四軍第四支隊の高敬亭はその鄂豫皖地域で南方三年遊撃戦争を戦っているのである

（本書 pp. 337-339）。つまり、こうした地方化は「土匪」に限りなく近づく可能性をはらんでおり、党中央から見れば統制に服さぬ「独立王国」へ向かう恐れを含むことになるのである。こうした地方化や一定の柔軟な路線への転換は、ソヴィエト区壊滅後に国民党が治安維持のために行った保甲制度（この問題に関しては William Wei "Counterrevolution in China, The Nationalists in Jiangxi During the Soviet Period", Ann Arbor, The University of Michigan Press, 1985 が抗日戦争開始直前までを視野に収めており、優れた研究である）への対応のためであり、「白皮紅心（Red heart and, white skin）」政策（本書 p. 238, pp. 479-481 など）とも関わるものである。すなわち表向きは国民党の保甲制度に従いながら、裏では食糧を与えたりなどして南方紅軍を支援してくれる村人の確保のためであったのである。しかしながら、保甲制度の実施による旧ソヴィエト区の国民党による再掌握はかなり進み、その分、南方三年遊撃戦争を困難なものにしてい

った（本書 p. 31 など）。当時の文献にも、そうした国民党の自信が表れているものが見うけられる（中国地政研究所叢刊、蕭铮主編、民国二十年代中国大陆土地問題資料、許振鸞著『皖西匪区土地整理問題』、台北、成文出版社有限公司、一九七七年など）。従って、生き延びた者たちも孤立し、党中央とはもちろんのこと、相互の連絡すら不十分にしかとれず、第二次国共合作が成立したことを知らせようにもできず、それを湘贛地区の譚余保に告げに行った陳毅が逆に怪しまれて殺されなかったり（本書 pp. 408-413）、「漳浦事件」のように下山したところを国民党によって武装解除されたりといった事件がしばしばあった（前掲拙稿）。孤立とそれによる士気の低下、人員の減少が主要な原因であった。「蒋介石は共產主義者から精神的支援、情報、物資の供給、隠れ場を奪い去った」（本書 p. 466）のであり、それゆえ「石器時代さながらの生活」を余儀なくされ、銃と傘とマッチが「三宝」となった（本書 pp. 473-474）のである。



その他、南方三年遊撃戦争が展開された地域は、おしなべて山岳地帯であるが、その中でも、山がちで温暖な福建省の自然地理的特性が生き残りを容易にしたこと、項英や陳毅は小人数になっても党組織を維持したことなど、興味深い指摘が随所に見受けられる。

Benton氏は、「実際にあったように(it actually was)」(本書p. xxv) 南方三年遊撃戦争を描くことが本書の目的であり、「history is a story and its proper method is narrative」(同前)と続けている。ホメロスは『オデュッセイア』の冒頭で「かの人を我に語れ、ムーサよ」と歴史や文学、音楽などを司る九人の女神たちに祈りを捧げてから歴史を語りはじめた。ホメロスが女神たちに語って欲しかったのは「かの人」のことである。人間への興味こそが歴史の根柢にある。そして、「history」が「story」の同語源異形であることもまた、その方法論として「narrative」を選択させるのではないだろうか。進歩主義歴史観がさまざまな現

実の前に立ち往生し、進歩主義を支えてきたニュートンの世界観が揺らいでいる世紀末の今、歴史学もその起源に戻って考え直すべきではないだろうか。歴史は、語るところから始まる。事実が始まり、事実に関わり、資料に則して事実を語る所に意味がある。社会史の研究の多くが、従来の研究以上に叙述に力点を置き、種々の学問的方法論を援用しているのはそのせいだろう。「史料をして語らしめる」ことこそが歴史学の最も基本的な方法論であるが、いかに「語らしめる」かは歴史家の役割であり腕しだいである。史料を取捨選択し、それを配置しなおす。オーケストラの指揮者に極めてよく似ている。同じ譜面でも、演奏者によってまったくと言ってよいほど異なった演奏があるのと、全く同様であろう。スコアの中の一つ一つの音を分析し、それを各パートに指示し、一つにまとめてゆく。時には各パートに自由に歌わせる。歴史資料の扱いと同様である。「史料をして語らしめる」ことに通じるから。それが歴史そのもののおもしろさであり、歴史学

のおもしろさでもあろう。人への関心こそが、人文の学としての歴史学の基本であることはいまでもない。人が何を語り、何をしたのか、誰とどのように関わったのか、そこへの関心こそが歴史学であり、「history」が「his + story」である由来である。そのためにこそ、最も適した方法論が「narrative」なのではないだろうか。